

特集 戦時下の堺中生たち

『西谷君の日記』に見る

日誌抜粋



中47期卒業生。1945年3月、46期と同じ時に卒業した。グラウンドに作られた畑や防空壕が見える。

昭和十九年 六月一日
今日から、初めて日誌を書く。日誌は、つけることは今まで大へんいやだと思つてゐたが先生のお話をお聞きして、僕も一つこれから何年まで書くか力のかぎり書かうと思ふ。(略) 夕方は、弟と前の国民学校へ運動、**※**手りゅう弾投、金棒走りなど、十月の体力検定にこたへてやつてゐる。

六月八日
今日は三十回**※**大詔奉戴日なり。そぞろ十二月八日を思ひ新たに米英撃墜、撃ちてしまふを心に念す。

六月十二日
野外演習の服装で学校へ出発した。(略)「元氣旺盛さすが第二学年の野外教練である」と言はれたときはうれしかった。(略)連絡兵、伝令、斥候も大変良かった。西浦斥候長以下5名は家原寺の敵搜索に対し良くそうさくしたので大変ほめられていた。

六月十五日
自分らの一年の時**※**教練科をご指導下さつた中尾先生は、いよいよ再度のお召しにあずかり(略)きようはその中尾先生とお別れの式を運動場にておごそかな中にもはりきつた式を終つたのであつた。

六月二十一日
野外教練の服装にて、上野芝付近の久世村へ**※**勤勞奉仕(略)だ。勤勞奉仕は松本君と二人で麦の穂を取つた。後の茎をぬきたばねて運ぶのであるが(略)自分は麦の茎を抜くのに一本々々米英撃滅を思つて抜いた。

七月十四日
今日は(**※**通年動員)の上級生徒の壮行会があつた。校長先生のお話、教官殿の注意、皆心にうなづくことばかりである。

九月十三日
今日の五時間目に築山の横の土地即ち**※**運動場の東の方は僕らの手により畠と変はつた。僕らの畠は僕らの手により作るのだそぞだ。

十月二日
八時校庭に集合校長先生よりテニヤン、大宮両島の玉砕のお話を聞き、今日のこの野外訓練を一層緊張してやろうと心に念す。校庭をあとに竹を銃と思つてかつぎ、深井村に前進それから家原寺にて伝令動作。(略) 鳳をへて浜寺に至る。(略) 晝食後すぐに整列、南軍北軍に分かれ戦闘訓練をする。この訓練の中、散開法、歩哨、斥候、伝令の諸動作が行われる。

十月十九日
昨日降つていた雨は今日は止んでゐた。**※**校内の兵隊さん達今日は銃剣術の試合なの運動場に線を引いてゐた。作業は従つて大へんしにくかつた。(略)

十一月十五日
新聞 **※**富嶽隊出撃。さきの敷島隊又、萬朶隊といひ、まさに我が皇軍必死必中の肉弾となつて突撃、またもやつた戦艦一隻轟沈であつた。この攻撃隊の石川廣中尉は本校・堺中の四十一期生と先

生からお聞きし、我々の先輩のやつた体当りに、我々もきつと続かねばならぬと思つた。

十二月七日
一時半頃、強烈な**※**地震あり、いまも家が倒れるかと思つた。(略) 家も垣根も道路も、まるでひっくり返るかと思つた。

昭和二十年 一月十九日
研修は、中川先生の毒ガスについての話、書からまさに体操を始めんとする時、警戒警報がなる、すぐ整列をして門を出ると空襲警報となる。駅に来てみると電車は来ていた。一ぱいで乗れず次の電車を待つ。(略) まもなくB29八機を駅より見る、にくいくいにくい米機ゆうゆうと頭上を行く。

二月七日
体操は俵をかきいで百米を走るのである。自分は三十七秒なり。四時間より雪が降りだす、当番をすませて中百舌鳥駅へ**※**英霊出迎へ、四時半帰宅。(略)

三月十三日
今日は**※**物象と國語無しで、第一限は教練で銃の標準監査であつた。第二限は作業で防空壕の仕上げをやる。第三限は英語自習。(略) 夜中十一時、ふと目を覚ますと、ラジオは「敵大編隊が太平洋上より浪速に逐次来る」との情報にすばやく起きて、バケツに水を入れ、食糧、衣服一通りを壕に持ち込んだ。先頭の敵は見えなかつたが、後続機は大へんよく見えた。(略) **※**大阪方面の空は 真つ赤になつてゐた。

三月十九日
全学校(国民学校を除く)**※**授業停止 敵の攻撃急なる今日、國民全部が戦うことになり、この度の制度が文部省より発令される。

三月二十七日
今年、**※**四年・五年の卒業式なり。我が二組は一組とともに参列を許される。

四月七日
今日は校内作業中警戒警報発令、ついで空襲警報となる。直ちに帰宅す。十一時になつても解除にならず、父と自転車で大阪の親類の家へ行く。(略) 見渡すかぎりの災害地で(略) よくもこんなやりやがつたな。とたたくやくしてならず、(略)

四月十一日
今日は本校開校以来満五十年の記念日で式があり、校長先生より、本校の概略のお話をお聞きする(略)。本校は他の学校と違つて、**※**昭和七年長くも昭和の今上陛下が、本校にあらせられ奉つた玉跡の校として、大いに誇りを持たねばならぬとおつしやつた。

※(注) 手りゅう弾投 当時の國民体力章検定(男子)では100メートル疾走、200メートルメートル走、走幅跳、運搬、懸垂屈臂など並んで手榴弾投があつた。

大詔奉戴日 大東亜戦争開戦の日(1941年12月8日)にちなんで、翌年から毎月8日が**大詔奉戴日**と定められた。

教練 当時の体操は体操・教練・武道から成り、教練には陸軍の現役将校が配属されて指導にあたつた。毎週の授業時間割に組み込まれた教練と、宿泊を伴う信太山での野外教練とがあつた。

勤勞奉仕 戦争激化にともなう労働力不足を補うため学生・生徒の勤勞奉仕が義務づけられた。堺中生的場合は天皇陵清掃、農作業手伝い、防空壕掘り、泉佐野での飛行場建設など。

通年動員 短期間の勤勞動員が昭和19年からは通年動員となり、堺化学、川崎航空機堺工場、木津川船渠、堺造船所、富士造機(後の富士車輛)その他に配置された。46、48期生は工場直接製造に従事したが、49期生は雑用中心であつた。

運動場の東の方は僕らの手により畠と変はつた。 食糧増産のために校庭の一部が畑になり、イモが作られた。

校内の兵隊さん 「学校は兵營となつてゐた。銃器庫もあつた」(中49期生談)

富嶽隊・敷島隊・萬朶隊 いずれも特別攻撃隊の隊名。

地震 昭和東南海地震。震源地は熊野灘沖、M7.9、最大震度6。

物象 物理・化学・鉱物学などをあわせた科目。当時は理科は物象と生物から成つてゐた。

英霊出迎へ 戦没者の遺骨を迎える英霊出迎へは「授業そちのけでしよつちゅうあつた」(中49期生談)

四年・五年の卒業式 戦争の激化にともない、中47期は4年で卒業となり、昭和20年3月、中46期と同時に卒業式が行われた。翌年は中48期が卒業する予定だったが、従来通り5年制となつたため、昭和21年は卒業がない年となつた。

大阪方面の空は真つ赤に 昭和20年3月13日深夜、14日未明にかけての第1回大阪空襲。B29機が274機飛来した。

授業停止 昭和20年3月、決戦教育措置要綱が閣議決定されて1年間授業停止、5月には戦時教育令により授業の無期限停止が決まつた。

昭和七年長くも昭和の今上陛下が、本校にあらせられ奉つた 同年11月13日、堺中学校舎が陸軍特別大演習御講評場となつたため。

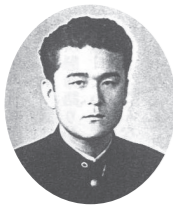


反正天皇陵で勤勞奉仕



信太山で、岸和田中との野外演習

『西谷君の日記』



1944(昭和19)年6月から翌年7月まで、当時堺中2年生~3年生だった西谷茂男氏=写真は21歳のころ=が綴つた日記。西谷氏は広島出身で当時は堺市大美野在住。3年生の5月に一家で広島に転居したので堺中は卒業してないが中49期にあたる。戦後、大阪に戻り、大学卒業後は家業を継いだ。1997年、急逝。1999年、夫人(高7回・西谷佐和子氏)が明石輝夫氏(中49期、故人)に日記を託し、明石氏ら同期生によって冊子『西谷君の日記—戦争末期のわれら中学生—』にまとめられた。夫人によれば西谷氏は「まじめが服を着て歩いてるような人」。時に地図や挿絵もまじえた几帳面な日記には人柄が表れているようである。

われら中49期生

西谷氏と同期の中49期有志が集まつていただき、お話を聞いた。日誌から伺えるように授業はまともに行われず、勤勞動員で堺化学や富士造機へ、昼食は大豆のしぼりかすと麦飯という日々。仕事はそれほどきつくなかつたようだが「富士造機が機銃掃射を受けたときは怖かつた。爆弾も落ちた」と恐怖を語る。7月10日の空襲では同期の半数くらい

が家や家族を失つた。自宅で被災して亡くなつた同期生も2名。被災後、転校を余儀なくされた者もいる。空襲体験は15歳の少年たちに大きな影を落とした。

「不発弾にふれて亡くなつた」小松君は、あの日「行きたくない。代わつてほしい」と言つてた。そう言われて断つた同級生は「僕が代われへんかつたからや」と言つて悲しんだ。

「われわれ中49期生は330人で入学。疎開したり、転校したりで卒業するとき

西谷氏はこの後5月に広島に転居したため記述がないが、堺中は1945(昭和20)年7月10日の空襲で作業科倉庫1棟を焼失。このとき、防空要員として校内を整理していた当時3年生の小松和寛氏が不発弾に触れて爆死、2人が負傷した。また、学校は堺市民病院(焼失)の仮病院となり、重軽傷者を収容した。

は245人だった。そして、卒業して新制高校3年に編入、高1回卒業生となつた。一つ上の学年も浪人して入つたりしたし、他から入つてきた人もいたから高1回は混成学年だった。殺されそうになつた経験も含め、さまざまな経験を共有して中学の5年間、ともに過ごし、さらに1年、合計6年。われわれは特別に親しくなつた、結束が固い学年である」(古家徳雄、坂口司、下園芳義、立龜眞平、増田隆、三島祥宏、村上彬、森耕三の各氏)

自由な雰囲気が残っていた中42期

中49期生より少し先輩にあたる中42期の佐々木高久氏、和田俊夫氏に話を聞いた。昭和11（1936）年入学、16年に卒業。50人×4クラス。入学したころは物資不足

もそれほどではなかったが、次第に悪化戦争の影響も少しずつ感じられた。「1年のときはストーブがあり、弁当を温めることもできたが、2年のときにはなかった」（佐々木氏）『滿州旅行のために毎月1円を積み立てていたが情勢の変化から行けなく

なり、そのお金は高知や高松への卒業旅行にあてられた」（和田氏）
 教練では荒っぽい先生もいて、生徒が殴られ、大けがをしたことがあったという。勤労奉仕では仁徳陵の土運びに駆り出されたことを覚えている。

一方、補講のときに長恨歌を暗誦してくれた辻校長、ひたすら「歌わせるばかり」だった音楽の先生、反対に「見せるばかり」だった美術の先生等、個性的な先生も多く、まだまだ自由な授業が行われていた。クラブ活動は佐々木氏は弁論部、和田氏は愛鳩部。愛鳩部は伝書鳩の訓練をするもので、軍隊によって奨励されていた。

終戦工作に命をかけた海軍中佐・藤村義朗（中25期）

第二次世界大戦末期、後輩の堺中生徒が教練や勤労奉仕に明け暮れていた頃、欧州で終戦工作に命をかけた同窓がいた。海軍中佐・藤村義朗（旧名・義一、海兵55期、1907年～1992年）である。

※

堺中25期・藤村義朗は1940（昭和15）年4月に海軍大学校を首席で卒業、直ぐに駐独大使館付き海軍武官補佐官としてベルリンに派遣された。

当時の欧州では、ヒットラー率いるナチスドイツがデンマーク、ノルウェー、オランダ、フランス等の諸国を次々に配下におさめ、イギリス軍を欧州大陸から撃退し、まさに破竹の勢いだつた。1941年6月にはドイツはソ連に侵攻し、各都市を次々と攻略して首都・モスクワに迫った。しかし、冬季に入るとソ連軍は各地で一斉反撃に転じ、12月にドイツ軍はソ連から撤退を余儀なくされ、それを機にドイツ軍は勢い

軍部の中枢ですらドイツ政府の公式発表を信じ、ドイツの勝利を疑わなかったのである。

ドイツに赴任した藤村の任務は、前線拡大に伴って窮乏しつつあった軍需物資を欧州諸国で調達することだったが、ドイツの敗色濃厚となった1945年2月、ナチスの秘密警察・ゲシュタポの監視の目が光るベルリンを脱出してスイスの首都・ベルリンに活動拠点を移し、日米直接の和平工作に取り組みはじめた。その頃、中立国・スイスには各国の様々な出先機関が集まり、敵味方入り乱れて情報戦を繰り広げていた。

藤村は、本国政府に対しドイツの敗色濃厚なこと、ドイツを撃退したソ連が一転して極東方面に向けて大量の兵員と機材の輸送を開始したことを伝え、注意を喚起する。一方で、米国大統領直轄の戦略情報機関「OSS」の欧州支局長・アレン・ダレス（戦後CIA長官を務めた）との接触に成功、1945年5月にダレスと面談した。ダレスは、日本との和平交渉についてホワイトハウスの承認を得た旨を述べ、藤村に対し「日本政府を代表する人物の派遣」を求め、「中国のしかるべき場所からスイスまで、米軍機で安全に送迎する」旨を伝えた。その日はドイツが連合国に全面降伏した日

で、藤村にとって「忘れることのできな

い日」だったという。

直ぐに藤村は、ダレスとの会談結果を東京に打電し、速やかな回答を要請した。しかし、何度督促しても本国から回答はなく、7月末の回答期限を過ぎてダレスとの接触は途絶えた。そして8月6日に広島、9日には長崎に原爆が投下され、15日に日本政府は無条件降伏したのである。無条件降伏の前日、海軍大臣副官から電話が入り、「君が持ち込んだあの話、何とかならぬか」と問われ、藤村は思わず「今ごろ何を言ってるんだ、百日遅い!!」と怒鳴り返したという。

戦後、帰国した藤村は貿易商社を興す。米・英を中心に事業展開するがたわら南米や東南アジア諸国の経済発展に尽力し、英国女王から大英帝国勲章、ブラジル政府からグラント・オフィシャル勲章等を授与され、また、在米中の居を構えたカンサス・シティーの名誉市民にも選ばれている。

他方、在米同窓に呼びかけて北米三丘会の結成に奔走、東京では戦時中に中断した在京同窓の月例昼食会（現在の三木会）を復活させ、昭和54年には旧制・堺中と新制・三丘の在京同窓を結集して東京三丘会の設立にこぎつけ、初代会長に就くなど母校愛溢れる人もあった。

終戦時、佐々木氏は予備士官学校在学中、和田氏は阪大工学部航空学科で陸軍から依頼されていたテーマを研究していた。

制度改革に翻弄された高4回

少し時代が下って、高4回は野村憲司氏に話を聞いた。

終戦の昭和20（1945）年、英彰小学校6年生だった。集団疎開で多くは東百舌鳥小学校に、氏は縁故疎開で富田林の青葉丘小学校に疎開した。その前に、大町にあった家は※建物疎開でつぶされ、大寺南門あたりを借りていたがそれも空襲で焼けた。

翌21年に堺中に入ったが、翌年に新制中学校発足、さらにその翌年に新制高校発足という学制改革の大混乱期。2、3年生は「併設中学校」の2、3年生として過ごし、卒業すると新制高校3年生に編入、高4回として卒業するという複雑な時期だった。堺中は22年から入学停止（25年に廃止）となつたので「自分たちは高校2年生になるまでずっと最下級生だった」。

また、併設中学校2年のときに府立堺高女（今の泉陽高校）、市立堺高女との男女交流があり、希望がかなった者、かなわなかった者、悲喜こももであった。



中25期・藤村義朗さん
 欧州戦線の状況を知らずにいた。日本政府や

※建物疎開 戦争末期空襲が始まると、燃えやすい日本家屋を前もって壊して空地を作り、被害の軽減を図った。堺では3620戸の建物が取り壊された。